

研 究 分 野	漁場環境	部 名	調査普及部
研 究 課 題 名	漁業公害調査指導事業		
予 算 区 分	水産業企画調査費		
試験研究実施年度・研究期間	H8～H20		
担 当	角 勇 悦		
協 力 ・ 分 担 関 係	小川原湖漁業協同組合、十三湖漁業協同組合		

〈目的〉

漁場環境の現況と問題点を把握し、将来にわたって資料を蓄積するとともに、経年変化を明らかにする。

〈試験研究方法〉

小川原湖に設けた7定点を4月から11月まで毎月1回の計8回、同様に十三湖に設けた6定点を4月から11月までの計8回、水質調査（透明度、水温、溶存酸素量、酸素飽和度、塩分、pH）を行った。

また、同地点（小川原湖の最深部除く）において、5、7、9月の計3回底質及び底生動物調査（エクマンバージ 15cm×15cm による採泥）、並びに1地点において大型水草群落調査を繁茂期（8月）及び衰退期（11月）の2回実施した。

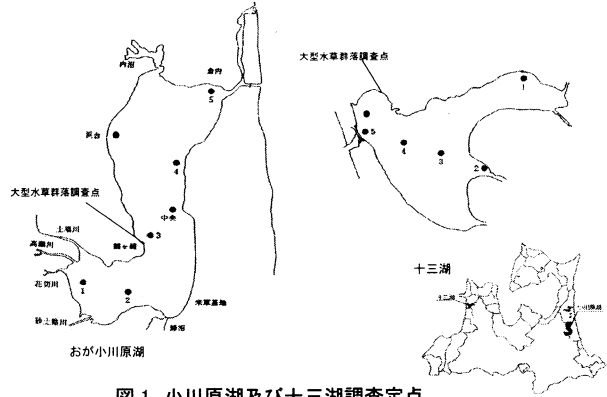


図1 小川原湖及び十三湖調査定点

〈結果の概要〉

1. 小川原湖

1-1. 水質調査(図2,3)

透明度は5月に低く9月に高い値を示した。水温は表層及び5m層ともに平年並みに推移し、8月の調査では低気圧の影響で低い値となった。溶存酸素量、酸素飽和度は表層及び5m層ともに平年並みに推移した。塩分は表層及び5m層ともに調査各月で平年よりかなり高い値を示した。pHは表層及び5m層ともに月別の変化が少なく、8月を除いた各月で平均値よりもやや高めに推移した。

1-2. 底生動物調査

例年通り St. 1、2を除くと二枚貝(ヤマトシジミ)が個体数、質重量とも多く優占種となっていた。イトミミズ等貧毛類は全地点で確認された。St. 1、2では、貧毛類以外ではユスリカ類が個体数、質重量ともに多かった。

1-3. 大型水草群落調査

例年通り岸側はヨシ、沖側はヒメガマの群落が形成されていた。繁茂期の密度は前年比4.6割減の64本/㎡であり、衰退期においても1.3割減の65本/㎡であった。

2. 十三湖

2-1. 水質調査(図 4, 5)

透明度は5月に低く6月に高い値を示した。水温は表層及び底層ともに平年並みに推移し、8～10月にかけてやや高い値を示した。溶存酸素量、酸素飽和度は表層及び底層ともに平年よりも高い値を示し、特に5月と8～11月に高かった。塩分は表層及び底層ともに8月を除いた各月で平年よりかなり高い値を示した。pHは、表層では月別の変化が少なく、調査各月で平均値よりも高めに推移し、底層では表層同様月別の変化が少なく、8月のみ平年より低い値となった。

2-2. 底生動物調査

例年通り全地点において二枚貝(ヤマトシジミ)が個体数、質重量とも多く優占種となっていた。また、St. 1, 2 ではイトミミズ等の貧毛類が多かった。海水流入口付近の St. 5, 6 ではヨコエビ等の端脚類及びウミナナフシ等の等脚類が多かった。

2-3. 大型水草群落調査

例年通りヨシの単一群落が形成されていた。繁茂期の密度は前年比 3.7 割増の 85 本/㎡であり、衰退期には倍増の 129 本/㎡となった。

〈主要成果の具体的なデータ〉

—◇— 12カ年平均 —□— H20(表層) —△— H20(5m層)

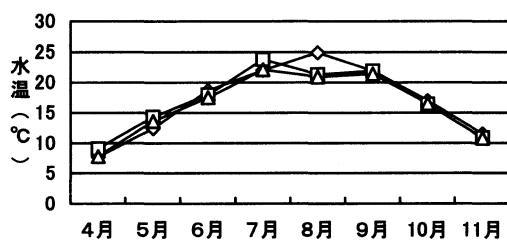


図2 小川原湖水温

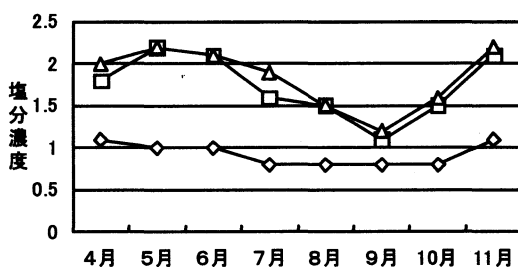


図3 小川原湖塩分

—◇— 12カ年平均 —□— H20(表層) —△— H20(底層)

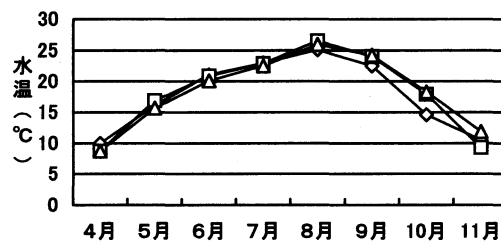


図4 十三湖水温

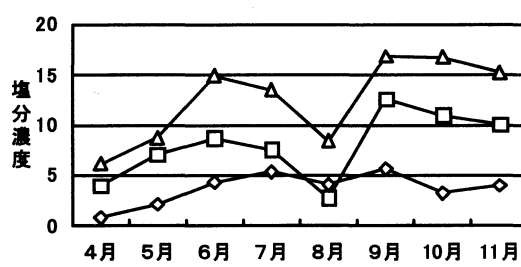


図5 十三湖塩分

〈今後の問題点〉

特になし

〈次年度の具体的計画〉

本年度同様

〈結果の発表・活用状況等〉

漁場環境美化推進協議会等で報告